

御神鶏

石上神宮では、境内の静けさが鶏の鳴き声で破られることがよくある。神宮は 20 羽から 50 羽の鶏の住処となっており、伝統は 1980 年代に最初の数羽が寄贈されたことから始まった。それ以来、神宮には定期的に新しい鶏が贈られ、雄鶏も雌鶏も増え続けている。このような鳥は、三重県の伊勢神宮を含む他の神社でも飼育されている。東アジアでは、鶏は長い間、

守護神や魔除けとして見られてきた。こうした思想は 6 世紀の中国にまで遡ることができ、ある地域では魔除けのために門や戸口に鶏の絵を貼るのが一般的だった。

世界の多くの地域と同様、日本においても、にわとりは夜明けを先駆ける者という象徴性を有している。

この国の建国物語では、太陽の女神である天照を隠れ場所から誘い出し、世界に光を取り戻すために、多くの神々が鶏を集めて鳴かせたと記されている。

様々な品種の鶏が木陰の多い神社の境内で昆虫を狩り、誇らしげに闊歩している。中でも「長鳴鶏（ながなきどり）」は、長くよく鳴くように品種改良された鶏である。